

事例報告 H29-6(1)

団体名： 橋本市立清水小学校（橋本ひだまり倶楽部）（和歌山県）

プログラム名： 郷土の森の森林体験からふるさとの自然を考えよう

（１）プログラムの目標

自分達の周りの地域（ふるさと）の人々とともにさまざまな体験をすることで、地域の自然や産業に関心をもつとともに、地域の環境保全や生活向上のために自分達が現在及び将来にわたって出来ることを考え、実践することを目標にしている。

4年

橋本ひだまり倶楽部と連携して、橋本市運動公園の近くの「郷土の森」での森林探検、木工体験、竹林伐採体験を実施し、森林の中で活動することを楽しむとともに、地域の自然環境の保全に関わっている方々と出会い、環境を保全することの大切さを学ぶ。

（２）プログラムの概要

本校では、地域の自然環境に応じた人々の暮らしや後世に伝えるために維持管理している人々の思いに触れ、自己の生き方について考える子供を育てていきたいと考え、全学年を通じてふるさと学習を実施している。

4年生は、ふるさと学習の一環として、県緑育推進事業やみどりの募金事業を活用して、郷土の森で森林体験や木工体験、竹林伐採等を行ってきたことについてまとめる。

（３）プログラムの展開

時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
	in、about、for の視点で活動内容を区分	
7	木工体験（10月）	
	①小刀で鉛筆を削る。 ②和歌山県のヒノキ板を使って、プランターボックスを作る。 ③間伐材を使って炊いたかまどご飯をいただく。 	①小刀の使い方について指導する。他人を傷つける可能性があることを徹底して指導する。 ②ノコギリ、カナヅチを使うので、安全面で十分配慮する。正しい使用法について、見本を示しながら丁寧に説明する。工程ごとに説明して、進度を確認する。 ③かまどで炊いたご飯や豚汁をみんなで分けて食べる。 
	in 木工体験で、和歌山県の木材の活用についての関心を高める。	
4	森林探検（10月、12月）	
	①森林探検では、五感を使って森の中の鳥の声や匂い、感触などを楽しむ。 ②森林にはイノシシやリスなどの動物が生活していることや人間の生活との関わりを知る。 ③秋と冬の野山を比較し、違いに気付かせる。 	①森の中の危険について知らせる。 森を歩く心地よさを十分に味わえるよう声をかける。 ②森の中には食べられる木の実や草の実がたくさんあることやイノシシのぬた場があり、動植物の生活があることを知らせる。一方で、近くのゴルフ場からたくさんゴルフボールが飛んでくるなど、人間の暮らしとも近いことを知らせる。 ③草の実や枯れ葉の様子等、10月の山との違いから季節の移り変わりに気付かせる。
	in 森林探検で自然林に触れ、森林に関する関心を高める。	

3	竹林伐採（１２月） 竹林伐採を行う。 間伐の重要性について学ぶ。 	間伐の必要性について指導する。 ノコギリの扱い方について十分指導する。 切り株や切った竹を倒す方向に注意する。 切った竹は枝を払い、持ち帰りやすい長さに切ることを指導する。 周囲の児童に当たらないよう気をつけて竹を持つよう指導する。  
about 森林の役割や間伐の必要性についての知識・技能を学ぶ。		
2	校庭の美化（１２月） 郷土の森で作成したプランターボックスを利用して、校庭を花で飾る。 	卒業生を送るための作業であることを伝える。 地域の方が種から育てたパンジーであることを伝える。 
for 自分達が作ったプランターボックスが卒業生を送るために役立っていることを知る。		
（４）プログラムでの連携内容 （教育機関、地域、団体等での、①連携・協働先、②役割分担、③具体的な連携・協働の内容） ①連携・協働先：橋本ひだまり倶楽部 ②役割分担：児童に体験させたいこと、考えさせたいことについて学校とひだまり倶楽部で協議し、ひだまり倶楽部がプログラムを作成している。 当日までの材料の準備・郷土の森の点検・昼食の準備等は、ひだまりクラブが行う。 当日は、スケジュールに従い、ひだまり倶楽部の指導者が体験の指導をする。引率教員が児童管理を行う。 振り返りを行い、次年度の改善につなげる。 ③木工体験・森林探検と竹林伐採を２日に分けて行っている。 学校行事等と調整して日程・内容を決定している。 児童の状況にあわせて、毎年少しずつプログラムを変えている。 過去３年間は本立てを作成したが、平成２９年度は、より製作が難しいプランターボックス作りに挑戦した。		

(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目	
教科・項目、視点	学習内容
「感性的経験」 森を体験する 森を楽しむ	森に入り、木や土の香り、鳥の声、日なたと日陰の気温の違い等を楽しむ。 展望台から自分達の地域を見下ろす俯瞰の感覚を楽しむ。 倒木を乗り越え、枝をくぐり、道なき道を探検する感覚を楽しむ。 怪我やスズメバチの危険について知る。
「自然的特性」 植物や動物の生態を知る 自然の変化に気付く	広葉樹中心の郷土の森を、秋と冬の2回に分けて森林探検を行うことで、季節の移り変わりや自然の変化に気付く。 指導者から、植物や動物の生態について説明を受け、日陰や日なたなどそれぞれの特性に応じた生き物の生態に気付く。 栗、しいたけ、冬イチゴなど自然の恵みをいただくことで、人間と自然の関わりについて考える。
「管理・維持」 森林の役割を学ぶ 間伐の必要性	竹林伐採を実施し、間伐の必要性について学ぶ。 間伐材を利用したプランターボックス製作から、森林資源の活用について学ぶ。 イノシシのぬた場やゴルフ場から飛んできたゴルフボールから、環境を保全することの大切さを学ぶ。
(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)	
項目	E S Dの要素(7つの能力・態度)の視点で見つめ直して、 もっとも重視する視点の内容を記載してください。
①生きて働く「知識・技能」の習得	5 他者と協力する態度 プランターボックス作成で、板から部材をノコギリで切り出す際に、寸法を測る・板を押さえるなど協力して作成することで完成させることが出来る。 竹の伐採の際に、竹のどの部分にノコギリを入れるのが良いか話し合い、切り方・倒す方向についても互いにアドバイスすることができる。 間伐して短く切った竹を、長さや重さから誰が持つかを考え、協力し合って持ち帰る。
②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成	4 コミュニケーションを行う力 指導していただく大人への挨拶、礼など日頃固定された生活の中でなおざりにしがちな礼儀について、意識する。 初めての体験をするときには、指導者の説明を集中して聞く態度を身に付ける。 説明を自分なりに理解し、危険のないように作業を組み立てることが出来る。 わからないことは積極的に質問したり、意見や感想を自分の言葉で発表できる力を養う。
③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養	3 多面的・総合的に考える力 森には楽しいこともあるが、転落やスズメバチなどの危険もあるなど、危険を予測した行動を取る必要性を学ぶ。 間伐の必要性や森林資源の活用について学び、森林環境保全のために自分達が地域で出来ることは何かを考えさせる。
(7) 実施後、参加者の変化	
活動は4年目になり、定着している。4年生になると、郷土の森に行けることを楽しみにしている。「森林探検が楽しかった」、「冬イチゴがおいしかった」、「来年も来たい」という声が毎年聞かれる。 毎年、全校児童が行っている秋の遠足「国城登山」で、途中に見られる山に対する見方が変わった。(イノシシのぬた場、食べられる木の実、間伐、ポイ捨てのゴミ等) 自分達が作ったプランターボックスを卒業生のために使えることを楽しみにしている。	

地域学習への取組

和歌山県

橋本市立清水小学校

学校の概要

南は紀伊山地、北は紀の川に挟まれた平地の少ない地域です。

年々児童数が減少しており、本年度は全校児童89名で各学年1クラスずつの小規模校です。子どもたちは、素朴で素直で学年の枠を超え、仲良く遊ぶ姿が多くみられます。

校の周りは自然が多くふるさと学習には適した環境にあると考えています。



教育方針

やさしく よく学び たくましく生きる子どもの育成

やさしく思いやりのある子ども

進んでよく学ぶ子ども

たくましい子ども

研究主題

目的をもって主体的に活動に取り組み、学びあい深めあう児童の育成

環境保全の推進

身近な環境に意欲的に関わり、より良い環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動をとれる子どもの育成を図る。

学習環境の整備、校舎内外の整備・美化、環境教育の推進、地域学習の推進

地域の方々との連携・交流、保護者との連携・啓発

ふるさと学習

地域の先生

郷土の森の体験

ふるさと学習

1年生 かに捕り

2年生 町探検

3年生 柿の観察

4年生 史跡調査

5年生 田植え

6年生 黒河道

地域の先生



1年生 工作



2年生 盆踊り



3年生 グラウンドゴルフ



4年生 西行庵



5年生 しめ縄作り



6年生 へら竿

郷土の森の体験 4年生



成果

- ① 普段の生活を振り返る機会となった。
- ② 地域の自然を見る視点が変わった。
- ③ 環境保全について考えが深まった。
- ④ 子供達はいつもと違う姿をみせた。

課題

- ① 自分達の生活と森林との関わりについて考える。
- ② 間伐の必要性について考える。
- ③ 自分達に出来ることを模索してみる。
- ④ 校区での活動に広げる。

事例報告 H29-6(2)

団体名： 橋本ひだまり倶楽部（橋本市立清水小学校）（和歌山県）

プログラム名： 子ども力（こどもりょく） 小学生だって竹林整備!!

(1) プログラムの目標

- ① 市内にある森林に足を運び、身近に存在する自然の豊かさを知る。
- ② 森林体験により、四季を感じ、自然の面白さや変化を感じる。
- ③ 和歌山県の木材を利用し、森を活かし（木工・ホダギ作り）を実践する。
- ④ 森林整備を行うことで、道具の使い方や身近な危険を知る。
- ⑤ 森の中に流れるゆったりした時間の流れ感じ、再度、森に来たいと感じる。
- ⑥ 森林に関わる地域の人達によって、愛される森林づくりをしていることを知る。

(2) プログラムの概要

- ① 和歌山県内の小学1年から6年生を対象に、補助金を利用して体験活動を行う。
- ② 団体が持つプログラム内容を提示し、学校と協議の上、森林体験の内容を決める。
- ③ 活動プログラムの日程・時間配分・持ち物を明確にし学校と摺合せを行う。
- ④ 事前学習・事後学習、事後体験活動の いずれかの内容をプラスして決める。
- ⑤ 活動に伴う危険と危険回避の方法について学ぶ。
- ⑥ 自力または協同作業で、木工やホダギ作りを行う。
- ⑦ 森林の散策を行い、季節によって自然環境が変わることを目の当たりにする。
- ⑧ 竹林整備・樹木伐採、階段造り、薪拾いを行う。
- ⑨ 森林体験活動の感想を文字にして振り返る。

(3) プログラムの展開

時間数	プログラムタイトル	
	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）	
	in、about、for の視点で活動内容を区分	
7 時間	10月 和歌山県の木材を利用して木工作品を完成させよう！	
	①活動全般の注意を話す ②小刀を使った鉛筆削りを行う ③木工に必要な道具の使い方を学ぶ ④講師より木工作品の製作手順の説明 ⑤木工作品製作 	①季節や天候によって、森の危険性を知る。 ②小刀で危険な道具の基本の使い方を習得する。 ③道具は、専門職から正しい使い方を学ぶ。 ④製作の流れを説明し、ポイントを押さえる。 ⑤学年以上の忍耐力と集中力が発揮できる。 
	in	
3 時間	10月	
	①雨天以外、全ての活動を屋外で行う。 ②屋外は鳥のさえずり、木々を揺らす風音感じ、ゆったりした気分で過ごす。 ③休憩時間は、森で自由に遊ぶ。 ④木工製作の合間の息抜きにの冒険タイム ⑤森で食べる昼食は景色がご馳走！ 	①自然の中で過ごす爽快感を味わう。 ②森の心地良さや、学校の教室内での事業との差別化・児童の最小限のストレスを考慮。 ③森の中では各々が自覚を持って行動する責任感を持つ ④遊びを見つけ出していく積極性を養う。 ⑤屋外での食事の美味しさの根源を知る。  
	about	

2時間	12月 小学生だって竹林整備!! (事後体験活動)	
	①雨天決行でも行う。 ②2人1組のペアを作る。 ③斜面でノコギリを使って竹林伐採を行う ④倒した竹の枝払いを行う ⑤適当な大きさに切り運ぶ。	①合羽・長靴の準備を事前に案内し、雨天に備える。 ②共同作業は、互いの協力が必要であることの認識 ③竹林伐採は、声掛けや足場に注意を払う。 ④枝払いを行い、片付け作業まで行う。 ⑤自分達が伐採したこと達成感・満足感を得る。
		
	in	

2時間	12月 森林散策・感想文	
	①森の中をゆっくり散策。 ②10月の森の自然との違いを実感する。 ③フユイチゴ食べ放題 ④森の土と校庭の土の違いを学ぶ。 ⑤感想文を書いて森林体験を振り返る。	①自らが五感を感じ習得していく。 ②季節よっての森の自然の変化を発見する。 ③根から採らないこと・自然の恵みに感謝する。 ④落葉で作られている腐葉土について知識を得る。 ⑤感想文にまとめることで改めて森林体験を再認識する
		
	for	
		

(4) プログラムでの連携内容

(教育機関、地域、団体等での、①連携・協働先、②役割分担、③具体的な連携・協働の内容)

①連携・協働先

和歌山県伊都振興局林務課 教育委員会 橋本市内小学校 橋本ひだまり倶楽部

* * * * *

②役割分担 ③具体的な連携・協働の内容(プラン1)

- (ア) 和歌山県伊都振興局林務課から教育委員会に、次年度紀の国緑育推進事業を案内
- (イ) 教育委員会→各小学校へ紀の国緑育事業の募集を案内
- (ウ) 各小学校より、教育委員会へ緑育事業参加希望を連絡
- (エ) 教育委員会から連絡のあった小学校・橋本ひだまり倶楽部間で事業内容について打合せ
- (オ) 橋本ひだまり倶楽部から、教育委員会へ見積書提出
- (カ) 内容について、和歌山県伊都振興局・教育委員会・橋本ひだまり倶楽部で三者打合せをする場合あり
- (キ) 採択後、小学校・橋本ひだまり倶楽部で、実施日の詳細を打合せ
- (ク) 橋本ひだまり倶楽部会員と緑育事業内容・実施日について打合せを行う
- (ケ) 緑育事業実施日は、和歌山県伊都振興局の抜き打ち見学がある。
- (コ) 事業終了後、橋本ひだまり倶楽部から教育委員会へ、事業報告書・請求書提出

* * * * *

②小学校が独自で補助金申請し、教育委員会を通さずに森林体験事業を行う(プラン2)

- (ア) 小学校が、森林体験補助金(緑の募金事業)を独自に選択
- (イ) 小学校より、橋本ひだまり倶楽部に事業内容・見積書作成依頼
- (ウ) 小学校は、市農林振興課へ補助金申請書を提出。
- (エ) 市農林振興課→和歌山県伊都振興局林務課へ、補助金申請書提出。
- (オ) 採択後、小学校と橋本ひだまり倶楽部で事業内容等打合せ。
- (カ) 橋本ひだまり倶楽部会員と事業内容・実施日について打合せを行う
- (キ) 事業終了後、橋本ひだまり倶楽部から小学校へ請求書提出
- (ク) 小学校は、補助金の事業報告書を市農林振興課へ提出。

(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目	
教科・項目、視点	学習内容
1 生活・理科 自然的特性	1年生から4年生までに習う理科の中で、生き物・昆虫・植物の観察や知識を学ぶ上で、実際に森林に足を運ぶことが必要。日常生活の中で、森林や昆虫、植物などに接することが少ない児童にとって、森林は、感性を磨く生きた教科書である。
2 生活・理科・社会 感性的特性	感性は、教科書を勉強しただけでは得られないものである。自然に触れることも学習の一環として導入していただきたい。体験することで、目の当たりに、感性を研ぎ澄ますことが出来る。学習指導要綱の内容に照らし併せた学習と、森林体験が今後の重要な課題である。
3 社会・理科 管理・維持	森林問題を社会の課題として捉えていない日本の現状については、生徒だけでなく、大人も含め、日本全体の現在の問題である。幼い頃より森林に親しみ、見て触れて感じる経験など、森林環境についての意識が少ないことを感じる。知識の習得に励むことが優先される学習の中に、森林の現状・維持・管理について学びたい。
(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)	
項目	ESDの要素(7つの能力・態度)の視点で見つめ直して、 もっとも重視する視点の内容を記載してください。
①生きて働く「知識・技能」の習得	① 年間に数回の森林体験を通じて、小学生に生きる力を具体化するとは難しい課題です。森林体験や活動をしたから、すぐに成果や結果を求めるのではなく、長い年数を掛け、活動を継続していくことが大切ではないでしょうか。 ② 道具の基本的な使い方、危険回避については、クセがつく前に正しい基本の使い方を教えるのが適切です。
②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成	① ESDとは「持続可能な開発の為の教育」の意味が一般には理解しにくい言葉です。未知の状況にも対応できる3つの「○○力」の育成は、単発・短時間学習では決して養われるものではないと思います。長期継続して森林ESDを行う意思があるかどうか、教育機関の問題かと思っています。教育委員会や学校等の教育機関が、如何に児童の為に、長期に亘り、取り組む姿勢があるかどうかが重要課題ではないでしょうか。
③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養	① 森林体験をした結果、心に残ったことや「再度来たい!」というきっかけを活かしてあげることができたら、学びにつながっていく通過点の役割は多少担えます。しかし、学びを社会や人生に活かす人間性の涵養には、やはり森林体験だけでなく、どんなことでも継続を行かなければ、一過性のものに終わってしまいます。森林ESDで、児童の人生や社会に結び付けること＝継続した教育指導が必要かと思っています。
(7) 実施後、参加者の変化	
① 身近な場所に安全な森林の存在を知ることが出来た ② 季節によって森林の自然環境が変化することを体験できた ③ 森の樹木や木の実、薪を使って煮炊きや暖をとる、灰の活用等、の循環を学べる ④ 森に来ることで元気になり、緊張感も生まれ、挑戦心や協調性が今まで以上に養われる ⑤ 森林体験をすることが「楽しい、また来たい!」になり、次の新たな実践に繋がっていく	



人が入ること

森は甦ります

森に入ること

子ども達の心も甦ります

森林ESD活動報告

橋本ひだまり倶楽部